異文化理解をテーマとした講義

—韓国、中国と日本—

A Lecture on Intercultural Understanding

—Korea, China and Japan—

成戸　浩嗣　Koji NARUTO
（現代マネジメント学部）

抄　録

2020年度は、新型コロナウィルス感染拡大防止のため「遠隔授業」を行なうこととなり、筆者もTV授業やGoogle Classroomによる「課題型授業」を行なった。実際に始めてみると、予測できなかった様々な制約があって四苦八苦することとなったが、このような状況の中で救われたのは、かねてより大学紀要に掲載してきた「異文化理解」をテーマとした講義や演習に関する論文・報告がデータ(機関リポジトリ)の形で手元にあったことである[1)]。これらは中国、韓国、フランスをはじめとした外国と日本の文化的相違をとり上げたものであり、言語に関する記述も含んでいる。筆者の専門は「現代中国語統語論」、「日中対照言語学」であるが、「異文化理解」をテーマとした講義科目、演習科目(1～3年次)、卒論(4年次)も同時に担当してきた。最初は様々な資料を収集・整理して講義ノートを作成していたが、より整った形で受講者に提供する必要から、文章にまとめたものを大学紀要に掲載し、それらを教材として使用するようになった。また、外国語の語彙・文法現象には、日本語とは異なる発想によるものがあり、授業ではそれらについての解説が必要なことがあるが、上記の資料には学習者に知的刺激を与えてモチベーションを高めるという効果も期待できる。

成戸2020においては、日韓両国の間にみられるコミュニケーション・スタイルの相違や、韓国(朝鮮)語固有の文字であるハングルおよび漢字語について紹介するとともに、発音、語彙、文法面における特徴を、中国語や日本語と比較しつつ概観した。本稿はその続編として、韓国と日本の文化的相違を中心とし、関連する範囲内で中国と日本の文化的相違もとり上げたものである。「文化」の概念は広く多岐にわたるが、ここではコミュニケーションの際に表面化するものの見方や考え方、行動様式などを対象とする。

キーワード

異文化理解(intercultural understanding)　歴史(history)　文化相対主義(cultural relativism)
友人関係(friendship)　コミュニケーション(communication)

目　次

1　異文化について学ぶ意義
2　異文化交流の歴史
3　文化的相違の具体例(その１)
4　文化的相違の具体例(その２)
5　友人関係
6　コミュニケーションのスタイル
7　おわりに

1　異文化について学ぶ意義

外国人との接触・交流の機会はかつてに比べると増えており、異文化に関する知識は、日本に生まれ育った人々にとっても生きていくためのスキルとしてその必要性を増している。このような状況下にある現代の日本社会では、**当事者意識をもって異文化の問題に向き合う**とともに、**異文化との出会いで生じる戸惑いや困惑、ストレスなどを最小限にとどめ、冷静かつ適切な対処をする必要性を認識する**ことが求められるようになってきている。

文化ごとに異なる価値観はそれぞれの言語に反映されており、話の展開の仕方も異なるのであるが、こういったことを外国語の授業で詳しく学ぶ機会はあまり多くない。外国語の授業では、読む、書く、聞く、話すといった運用面での知識・技術の習得に多くの時間と労力が割かれるためである。しかし、コミュニケーションを円滑に行なうためにはそれだけでは十分とは言えない。言語の表現形式には、それらを使用して生活している人々のものの見方や考え方が反映されており、**異言語話者との間で意志疎通がうまくいかない場合、相手が使用する言語の文化的背景に関する知識不足が原因となっている**ことがしばしばである。このことは、外国人と日本語でやりとりしてみればよくわかる。人からの誘いを婉曲に断る際の「また今度にしましょう」は日本人がよく口にするフレーズであるが、外国人には通じない。「前向きに検討します」に至っては、日本人でさえ理解不能なことがある。

異文化について学ぶ意義は、**「自分と他者は違うのだ。違いを知った上で付き合うことが大切である」**ということに集約される。これまでに担当した講義や演習では、このことを受講者に意識づけしてきたつもりである。「日本人と外国人」の間にみられる文化的相違をめぐる問題はそのような意識づけのためにふさわしい素材であるが、同じ民族であっても、出身地、家庭環境、年齢層、性別、職業などによってものの見方や考え方、行動様式に違いがみられ、それが「日本人と外国人」の間におけるよりも大きいことがある。このようにみてくると、**「日本人と外国人の間にみられる文化的相違」について知る**ことは、**「自分と他者」の違いについて考え、そこから得たものを他者とのよりよいコミュニケーションに生かす**ことを学ぶための出発点であり、幅広い視野で物事を客観的にみることにつながるということができよう。

2　異文化交流の歴史

日本のような島国の場合、外国と往来するためには海を越えなければならないため、異文化との接触は限定的であった時期が長く続き、多くは「外からの人や物の流入」という形で行なわれてきた。しかしながら、世界全体で見れば陸続きで他国と国境を接している国の方が多く、異文化接触・交流は総じて大規模なものであった。このことは、古代より高度な文明・文化を築き上げていた中国の場合も例外ではない。「中国文化」と呼ばれているものは様々な文化が融合してでき上がったものであり、その影響を強く受けた「朝鮮文化」や「日本文化」にもそのような性格が備わっている。このような歴史的視点は、現代の韓国文化や日本文化について考える際にも極めて重要である。**文化は文明のように短期間に変化したり移入したりできるものではなく、**「伝統文化」という言葉に象徴されるように、**長い時間を経ても「変わらない(or 変わりにくい)」**という特徴をもつ。反面、ある文化が他文化からの影響を受ければその結果が簡単に消え去ることはなく、このことは物質面よりも精神面において顕著であると思われる。文明が高度に発達した現代においても依然として人々が「韓国人(or 中国人、日本人)らしさ」を備えているのはそのためである。このように、文化についてみていく際には、それぞれの国あるいは地域の歴史について知っておくことも大切である。それぞれの文化は、それらの担い手である民族が現在に至るまでたどってきた道の延長線上に位置しているからである。

多文化融合の歴史をもつ中国

中国文化は、大陸にあって他文化との「接触→交流→融合」を繰り返してきた歴史をもつ。中国最初の統一王朝とされる秦(B.C.221-B.C.206)でさえ、もとは非漢民族であった可能性が否定しきれないとされる[2)]。また、日本が「遣唐使」を派遣したことで知られる唐(618-907)は、外国との交流を積極的にすすめた王朝であり、首都の長安には道教、仏教とともに、西域から伝わったイスラム教、キリスト教(ネストリウス派 ── 景教と呼ばれる)などの寺院があり、交易のために多くの外国商人も訪れていたようである。この時代に唐を訪れていた外国人のうち、イスラム教を信仰する人々の子孫は現在も「回族」として一大勢力をなしている[3)]。さらに、中国における統一王朝は10世紀以降、「宋→元→明→清」の

ように移り変わったが、これらは農耕民族である漢民族の王朝(宋、明)と遊牧民族の王朝(元 ― モンゴル民族、清 ― 満州民族)の交代史となっている。元や清のような強大な異民族王朝の支配を受けた経験をもつ中国は、異文化の受容がその意志に反するものである時期も経験している。中国に成立した歴代王朝は様々な民族を抱えつつ興亡を繰り返し、中国文化も異文化との直接的な関わりを通して長い間に形成されてきたため、多様性を備えるに至ったのは必然であると言えよう。

中国文化と朝鮮、日本

中国は歴史上、周辺地域に対して政治的・文化的な影響をおよぼし続けてきた。周辺の国々にとって、中国王朝とのつき合いは対等なものではなく、中国王朝から正式な政権として認めてもらう「冊封(さくほう・さっぽう)」という形をとり、臣下の礼をとりつつ外交関係を結ぶのが通例であった。文明・文化の水準が隔絶した中国とのつき合いは双方向的なものではなかったのである。日本も例外ではなく、遣隋使・遣唐使の時代に学者・僧侶などの留学生(るがくしょう)によって中国の進んだ文明・文化が日本にもたらされたのは周知の通りである。仏教や儒教は、ごく一部の例外を除き、経典や漢籍などの書物を通して吸収された。時代が下がり、平安末期には日宋貿易が、室町期から江戸期にかけては日明貿易などが行なわれたが、いずれも限られた人や物の行き来を通してであり、**周囲を海で隔てられた日本に対する影響はおおむね間接的なものであった**と言えよう。これに対し、朝鮮の場合は大陸と陸続きであったため**中国文化の影響も直接的であり、そこに住む人々の精神にも強い影響をおよぼした**と考えられる。儒教は、かつては朝鮮半島に成立した王朝が国を支配するための手段であるとともに道徳でもあったが、現代の韓国にも儒教に由来する道徳規範が生きており、身近な例としては、年長者を敬う、両親に孝行する、他人に礼を尽くす、先祖供養をする、などが挙げられる[4)]。韓国人のものの見方や考え方、行動様式からは、しばしば伝統的な価値観がかいま見えるのであるが、中国文化から受けた影響が直接的であるという点において韓国は日本とは対照的であり、両国の文化的相違を生む大きな要因となっている。

3　文化的相違の具体例(その１)

成戸 2010 では、中国と日本の文化的相違から生じる異文化摩擦の具体例をとり上げた。同資料は、講義・演習の受講者が異文化について興味をもち、様々なトラブルの解決方法を考えられるようになることを念頭に執筆したものである。受講者の反応はおおむね「自分の国では当たり前のことが通用しない」という驚きに集約され、異文化に関する知識の重要性が理解されたようである。

異文化摩擦の事例は、他人事として聞いている分には面白いかも知れないが、いざ自分が当事者として直面してみるとそれではすまされない。自分の言うこと、することが相手(or 周囲の人々)と違っていて、時には不審がられたり非難されたりするからである。異文化社会に身を置いた場合には、そのようなことが常に起こりえる。また、成戸 2019:156-157、159-160 で紹介したように、文化には「見える部分」と「見えない部分」があり(両者の中間に位置するものもある)、後者の場合には対処がより難しい。本章では、日韓の文化的相違が目に見えやすい例として「食事」、「入浴」をとり上げることとする。

① 食事

食事に関する話題は誰もが関心をもてる身近なものであり、異文化学習の素材としてとり上げるにふさわしいため、講義では日韓両国の違いを紹介するにあたって最初にとり上げた。

韓国人は一人では外食しない

外食する場合、韓国人は何人かで連れ立って食堂・レストランに入るのが一般的である。一人で食事をしている日本人の姿は、韓国人の目に奇異なものとして映る。朴大王 2013:54 には、韓国人は一人で店に入り食事をすることがあまりないため、ファーストフード店を除けば食堂にはカウンター席がないということが紹介されている。日本人が初めて韓国の食堂に一人で入った場合、どこに座ってよいかわからず、食事をしていても居心地はよくなさそうである。両国のこのような違いをとり上げた会話文が中山 2008:90-91 に収録されており、いつも一人で昼食に行く日本人社員が韓国人の同僚から「ああやって、いつも 1 人で食事に行くんだよな。変なヤツだ」と陰口をたたかれている。ついでながら、中国人も韓国人と同じく一人で食事をすることはあまりない。中国人の場合、家族以外の誰かと一緒に食事

をすることは、人間関係を築く(or 深める)という意味合いが強く、食事を共にしたことがあるかどうかで親密度が大きく異なってくる。

ご飯はスプーンで食べる

食事をする際の食器の使い方も日本とは異なる。韓国では箸はおかずを食べるのに用いるものであり、ご飯類や汁物を食べる際には金属製の匙が用いられる。箸もほぼ金属製である。汁物などを食べる際には箸と匙を同時に使用したりもするようであるが、主に匙が用いられる。また、**器を手に持って食べるのは無作法**とされており、箸でご飯を食べる行為も許されない(韓国の器には陶製のほか真鍮製のものもあり、手に持って食べるには重い)[5]。箸の起源は中国であるが、初期の箸の用途は限定的なものであり、「羹(あつもの)」の具を食べる際に用いられ、穀物の類(たぐい)はスプーンで食べていたとされる。この点は、現代の韓国における箸の使い方に通じるように思われるのであるが、現代では中国人は箸でご飯を食べ、スープ類にはレンゲを用いる。

料理は残してもかまわない

出された料理は残してもかまわないとされる。というより、出されたものを全部食べてしまうと「もてなしが十分ではない」とみられる。この点は中国も同じである。日本人が、「残すのは悪い」とばかりに全部食べてしまうと、招待した側を心配させることとなる。最近では食べ物の無駄をなくすため残さないようになってきているらしいが、上記のような考え方が一気になくなるわけではないであろう。

食事の支払いで「割り勘」はしない

外食の場合、みんなで食事をした勘定は、誰かが代表して支払うのが一般的であり、「コリアンペイ」と呼ばれる。目上の人やお金のある人が支払うのである。この点は中国も同様であり、「割り勘」という発想はない。韓国人、中国人とも「食事に誘った方がごちそうする」のが当然であると考えており、「食事に行こう」は「私がごちそうする」と言っているのと同じである。これは、「一人では外食しない」という習慣とセットになっているように思われる。日本人がしばしば行なう「割り勘」は、彼らの感覚では理解し難く、日本人から食事に誘われてもいざお勘定の際に「割り勘で」と言われればショックを受ける。一回の食事で誰かが皆の分を支払ったとしても、おごったりおごられたりの関係が続くのであれば、それは「割り勘」と同じことであり、長いつき合いの中でそのような関係が続いていくことになる。それが人間関係を維持する上で大切なことなのである。但し、韓国では若い世代の人々の間で「割り勘」が広まりつつあるらしい[6]。NHK2004 年 12 月:68、76 には、給料日直前に行なわれた飲み会の支払いの際に、上司の懐具合を推し量って皆で少しずつ飲み代を負担しようとする場面の会話文が収録されている。この場合は、給料日の直前であった、高級な店であった、という場面設定がなされているのであるが、「割り勘」に対する若い世代の意識の変化が関係しているとみることもできるのではなかろうか。

食事の後で飲みに行く

こうして食事の勘定をすませた後、「さあ、飲みに行こう！」と言われたら日本人は驚くであろう。韓国には「食事をしてからお酒を飲む」という習慣がある。朴大王 2013:62-63、黒田 2014:190-191 には、「食べる時はしっかり食べ、飲む時にはしっかり飲む」のであり、これはビールを飲む場合でも同じであると紹介されている。外食の場合には食事が終わってから改めて飲みに行くこととなるのであるが、体のためにはその方がよさそうである。一方、中国人にはこういった習慣はないようであり、飲みながら食事をしている。

目上の人に対する礼儀

韓国社会では礼儀がやかましく、目上の人に対して失礼にならないようにしなければならない。食事やお酒の席でも同様であり、**目上の人よりも先に料理に箸をつけてはならないし、お酒を飲む場合も先に口をつけてはいけない。目上の人に対して酒を注ぐ時に片手でするのは失礼とされる。**両手で注ぐのが丁寧な態度であるのは日本人にも理解できるが、つい片手でやってしまいそうであり、気をつけなければならない。また、目上の人からお酒を頂く場合には、勧められても 2 度までは断り、3 度目で受けるのが正しいとされる。注いでもらう時には自分のコップやグラスを空にした上で受ける。**目上の相手を直視してお酒を飲んではならず、横向きの姿勢で口元を隠しながら飲むのである**[7]。お酒を勧められた際に 2 度までは辞退するという作法などは、日本の時代劇において、貴人に拝謁する際に「面(おもて)を上げよ」と言われても二度まではためらう所作を

するという室町礼式を連想させられて興味深い。

② 入浴

食事と同様に日常の行為である入浴においても日韓両国で大きな違いがみられ、比較することによって日本人の入浴文化の特性がうきぼりとなる。

毎日は入浴しない、シャワーを浴びる

日本人は毎晩湯船につかるのに対し、韓国人の入浴は毎日ではなく、シャワーを浴びるのが一般的である。一般家庭では湯船をあまり使用せず、トイレとシャワーが一緒になっていることも多い。アパートでもバスタブがなくシャワーのみの物件はめずらしくない(特にワンルームの場合)。浴槽を使用する場合、自分が入った後で湯を抜いてしまう欧米式なので、韓国人が日本の家庭でお風呂に入らせてもらう際には注意が必要である[8)]。

毎日お風呂に入るのは日本人の習慣の中でも際立った特徴である。中国人も韓国人と同じく毎日ではなく、シャワーを用いることが多い(中国には、寝る前に“洗脚(シィジャオー足を洗う)”という伝統的習慣もある)。入浴の頻度が日本人は際立って高いのであるが、これには日本の自然条件が大きく関わっている。すなわち、夏場の湿度が高いことと、水が豊富にあることである。加えて、日本人の感覚では風呂に入るのは「湯につかって疲れをとる、リラックスする」ためであるという点も挙げられよう。単に身体をきれいにするためだけであれば、行水や水シャワーで十分なはずだからである。ついでながら、日本の家屋においては、浴室とトイレが別々である。もともと浴室は「体を清める」ところであると考えられており、「不浄」な場所である「厠／便所」とセットにするという発想はなかったらしい。

公衆浴場

韓国にも公衆浴場があり、日本の銭湯にあたるものを“목욕탕(モギョ゛クタンー沐浴湯)”という。朝出勤前に身体を清潔にするために行くことも多く、銭湯は早朝から開いている[9)]。聞くところでは、韓国の銭湯ではみな豪快に身体にお湯をかけるそうである。浴場内で寝そべっている人もいるのだとか。入浴風景が日本とは随分と違うのである。筆者も子どもの頃から長く銭湯通いであったが、他人にお湯がかかってしまうと「コラッ！」と叱られたものである。

ところで、中山 2008:30-31 には、韓国の銭湯に入った日本人学生が「ちょっと、学生」と知らないおじさんからタオルを手渡される場面の会話文が収録されている。「背中をこすってくれ」という意味なのであるが、銭湯でいきなりタオルを渡された日本人は状況がつかめないに違いない。これに関連すると思われるのが、朴大王 2013:82-83 に紹介されている「道でよく人に声をかけられます。それは普通ですか？」というタイトルの文章である。知らない人に声をかけられるのはめずらしくないというのである。もちろん、声をかけるからには道を尋ねるなどの用事があるのであろうが、日本よりも多いらしい。見知らぬ人であってもしばしばコミュニケーションがなされるという点では、韓国社会における方が人と人とのつながりが大切にされているようにも思える。

4　文化的相違の具体例（その２）

文化的相違の中には、異文化出身者とコミュニケーションして初めて顕在化するものもある。普段は目に見えない部分であり、トラブルが起きて初めて表面化するのである。本章では、比較的わかりやすい例として「謝罪」、「感謝」をとり上げる。

例えば、約束の時間に遅れた場合には真っ先に謝罪の言葉を口にするのが日本社会のルールであるが、この点においても文化ごとの差異がみられる[10)]。日本社会は世界的に見ても時間に厳しい方であると思われる。むろん、親しい友人の間ではそれほど厳格さが求められないということもあり、時間にルーズな日本人もいるのであるが、社会的ルールとしては「約束の時間は守るべき」となっている。「時間を守る人＝信頼できる人」は日本人の価値観であるが、世界的に見れば必ずしもそうではなく、どのような人が信頼に値するかの基準は一様ではない。中山 2008:16-17 には、待ち合わせの時間に遅れても謝らないで平気でいる韓国人の青年と、それにイライラする日本人の友人との会話を通して、遊びの約束に遅れても「会えたからいいじゃないか」と考える韓国人の価値観が紹介されている[11)]。このような時間に対する考え方は、グローバル化による価値観の均一化が進む過程で変化していく部分もあるものの、韓国人の精神の根底には依然として残っていると思われる。

約束の時間をどうとらえるかに限らず、外国人が日本人の感覚からすれば受け入れがたい言動、行動

をとった場合のストレスは、そのような行動をとるに至った理由を知っている、あるいは推測するだけの知識や経験をもっているだけでもかなり和らげられるはずである。言うまでもなく、**日本のルールは世界のスタンダードではない**ため、戸惑いや困惑がわき起こってくることも多い。「お国変われば…」であり、実際に体験するまでは想像もつかないことが少なくないのである。しかしながら、そのようなことがあり得るという「心の準備」をしておくだけでも、その後の展開は大きく違ってくると思われる。

異文化に接した場合の対処方法として、八代・世良 2010:14-15 は**「文化相対主義的な対応」**を提示している。自分が属する文化を絶対的なものとせず、たくさんある文化の一つとして「相対化」し、その上で対応しようとする姿勢である。このことは、目の前にいる**異文化出身者の立場を、自分と対等なものとして尊重することにつながる**[12]。相手を尊重することなくしてまともなつき合いなどは成立しないのであるが、日本にいる外国人に対してはこのことを忘れがちである。

謝罪

前述したように、日本社会では約束の時間に遅れた場合、まずそのことについての謝罪がなければ「常識のないヤツ」というマイナス評価をされるのに対し、韓国社会では必ずしもそうではない。また、齋藤 2005:8-11 には、人通りの多い横断歩道を渡っていてぶつかっても、誰も「すみません」とは言わないという著者の体験や、親友に対する「俺たちは友達だ。友達なら、謝るな」という映画のセリフが紹介されている。韓国人は、歩く時には自分の行きたい方向にまっすぐ歩いていくという（中国人も同様である）。当然ながら、人通りの多い場所では他人とぶつかる結果となるのであり、「これだけ混んでいるのだから、ぶつかるのは仕方がない」ということなのであろう。ただ、日本人はこのような場合にどちらからともなく「すみません」と言い、それでモヤッとした気持ちはおさまることが多い。「すみません」は、「ごめんなさい」よりも軽い謝罪の言葉として用いられ、これを口にすることによって満員電車からもスムーズに下りることができる。ちなみに、黒田 2014:66 が、街中で人にぶつかっても謝罪をしない若い女性の態度について、年配者に対する配慮という伝統的な「長幼の序」の消失であると述べているのは、同一の現象についてもいくつかの異なる見方ができるケースの好例をみるようで興味深い。

日本人から見れば「むやみに謝らない」という点では中国人も同様であり、八代・世良 2010:10-12 には以下のような事例が 4 コマ漫画とともに収録されている。

例１（八代・世良 2010:10）

日本語の授業中、授業に遅れてきた中国人の女子学生が先生（日本人女性）に一言、「バスが遅れた」とだけ言ってそのまま席に着いてしまった。先生はムカツク……。

日本人の感覚であればこのような場合、「バスが遅れて、それで…？『すみません』とかは…？」となるであろう。しかし、腹を立てる前に、一旦は立ち止まって考えてみる必要がある。「バスが遅れて授業に遅刻した場合、本当に責任があるのは誰なのか？」日本では、乗っていた電車が遅れて授業に間に合わない場合には、駅で「遅延証明」を出してもらうことができ、それが試験の日であれば「追試験」の対象となるケースもある。このように考えれば、上記の中国人留学生の態度は、あながち批判すべきものとは言えないのではなかろうか。但しこの点については、くだんの中国人学生が日本に来たばかりの人か、すでに長く住んでいる人かによって異なる見方がなされるであろう。また、日本では乗り物が時刻表どおりに運行するのが当たり前になっているが、外国では必ずしもそうではない。この点も、「バスが遅れたことで自分が遅刻したのは、自分の責任ではない」という考え方につながっているのかも知れない。そもそも中国人が口にする“对不起。（ごめんなさい）”は「顔向けできない」というのが本来の意味であって、この言葉を口にするのは“谢谢。（感謝します→ありがとう）”の場合と同様に「気持ちを込めて一度だけ」であり、謝罪、感謝のいずれにも用いられる日本語の「すみません」に比べると重い表現である[13]。例１のケースでは、「遅刻したのはバスが遅れたからである→自分は悪くない」と中国人学生が思っている以上、謝罪の言葉は出てこないのである。

謝罪をめぐるケースとしてはさらに、筆者が中国で体験した出来事を挙げておくこととする。

例２（筆者の体験）

夏季短期研修の引率者として北京の大学に滞在し

ていた時のことである。4 週間にわたる語学研修も終わり、洛陽・西安への旅行に出発した。先に訪問した洛陽では駅に現地旅行社のガイドが迎えに来ていたが、西安駅には出迎えの人がいなかったので(大学と旅行社との間に連絡上の行き違いがあったらしい)、しばらく待った後にホテルに向かった。ホテルから現地の旅行社に連絡すると、翌日の朝に社長がガイドをともなってホテルにやって来た。社長はお詫びのしるしとして小さなお土産を我々に配ったが、謝罪の言葉がないので学生たちはみな憮然(ぶぜん)としていた。

今になって考えれば、「社長が来た」、「お土産を渡した」という形で旅行社としてお詫びの気持ちを表現したのであろうが、これだけでは日本人の心には届かない。ただ、中国人の感覚からすれば、感謝やお詫びは形に表わすべきであるため、その気持ちをくみ取ろうとする姿勢もこちらには必要だったのかも知れない。ついでながら、中国の TV ドラマ「三国志」の中には、関羽を自分の部下にしたいと願う曹操がさかんに贈り物をする場面が出てくる。関羽は、曹操の自分に対する評価の高さを贈り物によって知り感激しながらも、最後にはそれらを屋敷に置きっぱなしにして、自分の主人である劉備のもとに向かうのである。これはあくまでドラマの中での話であるが、現代中国においても、人からもらった贈り物の価値は自分に対する評価であると考えられており、誠意は形にして相手に届けるべきであるという発想が自然なのであろう[14]。

中国で過ごしたことのある日本人は「中国人はなかなか謝らない」というイメージを抱きがちであるが、このようなステレオタイプ(型にはまった画一的なイメージ)にとらわれてしまうと、物事を正しく把握することはできない。「中国人はなかなか謝らない」は、視点を変えれば「日本人はすぐに謝る」ということであり、いずれが正しいかということとは別の問題である。彭飛 2006:38 には、中国を旅行した著者の知人(日本人)が「なぜ中国人はあまりお詫びをしないのか」と思っていたが、その後ヨーロッパに行って「よくお詫びをするのは日本人の特徴だ」と考えを改めたというエピソードが紹介されている。また、「一つのことに対して何度も謝罪の言葉を述べる」[15]、「顧客からクレームがついた場合、(こちらが全面的に悪いわけでなくても)とりあえず謝る」というのも日本人の傾向であり、後者の度が過ぎたものが「店員に土下座を強いるクレーマー」としてニュースになるケースなのであろう。自分は悪くないのに謝る……考えてみればおかしな話である。自分は悪くないと思っていても謝罪するという姿勢は、日本社会では人間関係をスムーズにする役割を果たすこともあり、時には必要とされるのかも知れないが、異なる文化に属する者から見れば自分の過ちを認めたことになり、場合によっては償いを求められることもある[16]。このような文化からみれば、日本語における謝罪の言葉は往々にしてその重みに欠けることがあり、「謝ったからいいじゃないか→水に流そう」という考え方とつながっているようにも思われる。山久瀬著／イ・ギョンス訳 2013:62 が「日本では、謝ることは必ずしも、解決のために次のステップを踏むことを意味しません。謝ることは、その場の緊張をほぐし、相手との和を保つための手段にすぎないのです。ですから、相手が謝ったとはいえ、そこからすぐに物事が解決されるわけではないのです」としていることは、日本人の「謝罪」に対する基本的な考え方を言い尽くしていると思われる。但し、組織の責任者としてふるまう場合には、日本人も簡単には謝罪しない。謝罪するということは相手に迷惑・損害をかけたことを認めることであり、組織として償いの責任が発生するからである。

感謝

謝罪の場合と同様に、感謝の言葉を述べるタイミングや頻度の点でも日韓の相違がみられる。日本人はささいなことでもお礼を述べ、時にはそれを何度も繰り返す傾向があるのに対し、韓国人は、親しい人の間でそのようにするのはかえって水くさいと考えているようである。このような違いが摩擦を引き起こす事例の一つとして、「物の貸し借りをめぐるトラブル」が挙げられる。他人が自分の物を使う際に一言の断りもなければ、日本人はギョッとするであろう。韓国人は、親しい人の間でいちいち「貸して」とは言わないようである。このことが日本人の目には「他人の物を無断で使う」という失礼な行為と映り、日韓の異文化摩擦を引き起こすのであるが、親しい人との距離のとり方の違いが表面化したケースであると言えよう。中山 2008:28-29 には、同じ部屋をシェアしている韓国人学生が、日本人学生の背広や靴下を無断で着たりはいたりするばかりか、しまいには小遣いを貸してくれと頼んでくるという内容の会話文が収録されている。ここでは日本人学生の方が

やや年上という設定であり、韓国人学生は日本人学生のことを“형(ヒョンー兄さん)”と呼んで頼りにしている。また、同:54-55 には、「韓国の友人と一緒に外食をしている最中に、いきなり人の料理に手を出してこられた」ことに対して日本人が驚きやいらだちを感じる場面の会話文が収録されている。似たような事例としては、齊藤 2005 に挙げられている以下のようなケース(実話)が挙げられる。

例３(齊藤 2005:55-59)

韓国に留学している日本人学生が、学生寮の共同冷蔵庫に入れておいたデザートやお菓子、ジュースなどを韓国人の友人が食べたり飲んだりしてしまうので、それらに自分の名前を書いて入れるようにしたところ、「一緒に住んでいれば家族も同然なのに何故名前など書くんだ！」、「僕のことを泥棒と言っているようなものだよ！」と抗議されケンカになってしまった。「ルームメイトであり、それまで何かと助け合ってきた間柄なのに、どうしてそんな水くさいことをするんだ」と考える韓国人と、「親しくても人の物をもらう時には一言断るべきだ」と考える日本人の意識の違いが表面化したケースである。

「たかがデザートやジュースぐらいでいい年をした大人がケンカかよ…」と思ってはいけない。**異文化摩擦においては、こういった小さなことの積み重ねが往々にして大きな衝突に発展することもある**からである。例３のケースとほぼ同様の記述が八代・世良 2010 にもみられるが、こちらは相手が中国人学生であると思われる。

例４(八代・世良 2010:16-19)

日本人学生の鈴木さんが、学生寮の共同炊事場にある冷蔵庫に入れておいたジュースを、友達である留学生のリュウさんに無断で飲まれてしまった。リュウさんは後で、「ジュース少しもらいました」と言ったが、鈴木さんはモヤモヤ感にさいなまれた。

同書は「セルフチェック」として、「あなたなら相手にどのように気持ちを伝えるか」と問いかけた上で、**「価値判断を保留して、コミュニケーションをする」**こと、**「相手を理解しようと努力する」**ことの重要性を説いている[17]。成戸 2019:157 でも述べたように、異文化との関わりにおいては**「衝突→理解→受容」**のようなステップをふんでいくのが理想であるが、まずは理解しようとする姿勢が大切である。例４のようなケースの場合、中国人の感覚では、友人に対して事前の承諾を求めたりお礼を言ったりする必要はない。リュウさんに悪気は全くなく、何が起こったのかさえ理解していない。韓国語の“친구(チングー友だち)”は日本語の「友だち」よりも濃厚な関係を意味し、お互い助け合って当然であるとされているが、この点は中国語の“朋友(ポンイョウー友だち)”も同様であり、友人に断りなく冷蔵庫のジュースを飲んでもかまわないということなのであろう[18]。リュウさんはジュースを飲んだ後、日本人学生に対してそのことを伝えているのであるが、お礼の言葉そのものではなくても、このような形で感謝の気持ちを伝えているのかも知れない。ついでながら、筆者が中国の大学に留学していた頃、授業中に隣の中国人学生(知らない人)の手がすっと伸びてきて机の上に置かれた筆者の本をとり上げ、パラパラとページをめくって見るという場面に何度か遭遇した。一通り眺めて堪能すると、「(見せてくれて)ありがとう。この本はいい本だね」と言いながら返してくるのである。驚くとともに、コミュニケーションの手順が異なっていると感じたものである。

また、中山 2008 には、友人間での物の貸し借りをめぐる以下のような事例が会話文として収録されている。ちなみにミギョンは、年上の美智代を“언니(オンニーお姉さん)”と呼んでいる。

例５(中山 2008:20-21)

美智代の持っている CD を借りたミギョンは、数日後に CD を返す際、“잘 드렸어.(よく聞いたわ)”と言ったが“고마워(요).(ありがとう)”とは言わなかった。こういう時は「ありがとう」と言うものだと美智代が言うと、**「だから『よく聞きました』って言ったじゃない」**とミギョンに返された。感謝の気持ちはあるものの、**どのような言葉でお礼の気持ちを伝えるか**という点における日韓両国の違いからこのような行き違いが生じたと思われる。

物の貸し借りをめぐっては、借りてどれぐらいたってから返すかという点でも違いがみられるようであり、同書には本の貸し借りにおける以下のようなケースが会話文として収録されている。

例６(中山 2008:32-33)

佐々木さんの小説を借りたチョン君が本をなか

なか返してくれず、1週間後に催促すると「まだ読んでないんです」という返事であった。「これ以上、貸してあげない」と思ってしまう日本人と、「本一冊ぐらいで何だろう？」と考える韓国人の意識のこのような違いの根底には、親しい間では**「友人の物」と「自分の物」をはっきり区別せず「우리（ウリー私たち）の物」と考える傾向**にある韓国人と日本人との意識の違いがあると解説されている。

親しい間でお礼など言うのは水くさいと考える韓国人は、手土産を持って知人の家を訪問しても「手土産です」と言わないことがめずらしくないようである。帰り際に「どうぞ」と言ったり、何も言わずそのまま置いていくこともあるらしい。このケースは、齊藤 2005:135-136 に著者の体験として紹介されているものである。黙って置いていくのは相手に余計な気を使わせないための配慮であるらしいが、日本人からみれば「忘れていったのかも知れない」と考えられ、手をつけるわけにもいかない。

以上、謝罪や感謝をめぐる韓国・中国と日本との相違について述べてきたが、このような文化的特徴は、時代の流れとともに変化していく。韓国や中国も異文化との接触・交流が増えるにつれて、グローバル・スタンダードに合わせて謝罪や感謝の言葉を頻繁に使用するようになってきているようであり[19]、このことは外国語の影響を受けるということでもある。具体的には、外国語を学習している若い世代の間で母語に変化が生じたり、外国語で書かれた文章が母語に翻訳され、その翻訳文の影響が広まるという形であらわれるのである。

5　友人関係

第４章で述べたように、韓国人は親しい間柄であれば日本人ほど頻繁に謝罪や感謝の言葉を口にしない。友人同士の距離は日本人のそれに比べると極めて近く、擬似家族とも言えるような、濃厚なつき合いをする傾向にある。このことは、親しい友人との関係を兄弟姉妹に見たてて“형（ヒョン）／오빠（オッパ）－（弟からみた）お兄さん／（妹から見た）お兄さん”、“누나（ヌナ）／언니（オンニ）－（弟からみた）お姉さん／（妹から見た）お姉さん”、“동생（トンセン－同生）－弟 or 妹”と呼ぶことにもあらわれている。韓国人にとっての友人とは、「同じ共同体に属する者」ということなのであろう。久田・韓 2017:28-29 には、韓国人には「他人」という概念が弱く、「学縁」、「血縁」、「知人の縁」を通じて人間関係の絆を求めようとする旨の記述がみられ、共同体を同じくする者との関係を大切にする韓国人の価値観がうかがわれる。友人は同じ共同体に属する者であるため、その者に加えられた理不尽な仕打ちに対しては自分に対すると同じように怒り、抗議することもめずらしくないようである。中山 2008:48-49 には、アパートを追い出されそうになった友人（日本人）のため、大家に文句を言いに行こうとする韓国人のケースが会話文として収録されているが、こういった行為は韓国人の感覚からすれば当然なのであろう。但し、このような感覚は、共同体の外にある者を排除しようとする姿勢と表裏一体をなしており、このことは、久田・韓 2017:208-209 の「『우리（ウリー私たちの）』という言葉には、家族主義、集団主義、排他主義の思想が染み付いており、『私たちの』中に入らない対象は徹底的に追い出す風土もやはり共存しています」という記述にあらわれている。これまで述べてきたように、韓国人の友人関係は日本人に比べて濃厚であり、物の貸し借りをめぐる例５、例６の事例からもみてとれるように、貸し借りの際に堅苦しいやりとりはなされないようである。また、人から物をもらった場合にお礼として後で何かを贈る、いわゆる「お返し」という日本人の習慣も韓国人には理解しにくく、自分の好意がつき返されたように感じるらしい[20]。韓国人の友人関係は「助け合う」関係であって、中山 2008:28-29、黒田 2014:51 の言葉を借りれば「迷惑をかけ合う」関係であり、「迷惑をかけることが親しさの証し」なのである。第４章の「感謝」で紹介した中山 2008:28-29 の事例にもみられるように、「助け合い」には金銭の貸し借りも含まれる。この点については齋藤 2005:13-17 にも記述があり、貸してくれなかったら「あいつは本当の友だちじゃない」ということにもなりかねない。このことは換言すれば、「困った時に助けてくれる人＝信頼できる人」ということである。

友人関係が日本人の場合よりも濃厚である点では、中国人も同様である。中国社会においては、家族をはじめとする血族の関係が最も大切であり、地縁すなわち同じ出身地の者との関係も重要である。特に、故郷を遠く離れて生活している場合には“同乡（トンシャング－同郷の人）”の存在は心強く、お互い助け合う仲間となる（方言間の相違が大きい中国にあっては、そもそも言葉が通じる者同士である）。友人す

なわち“朋友”も同じく互いに助け合う関係であり、そうでない者は“外人(他人、第三者、見知らぬ人／局外の人、グループ外の人)”として親しまない[21]。このことは具体的には、中島 2015:82-83 が「中国では一度だけの関係は、結局は縁がなかったのだというふうに受け止めます。仲よくなった人は『身内』ですから一生懸命尽くしますが、それ以外の人は『赤の他人』です」という中国人留学生の話を紹介するとともに、「人間関係が構築できていない相手には、何の義理もない。ビジネスであっても、どんなことをされるかわからない」と述べている点に示されている。このことで思い出すのが、例２と同じく夏季短期研修の引率中に遭遇した以下のケースである。

例７(筆者の体験)

語学研修後の旅行に出発するため北京駅に行った。参加者の一人が風邪気味で熱もあったので、薬を買おうと駅構内の薬局を訪れた。薬剤師の女性は３種類の薬(錠剤 2 種類、漢方薬 1 種類)を出してきて、「これら全部を一緒に飲めばすぐによくなる」と言った。素人目にも疑わしく思えたので「一度に飲んで大丈夫なのか？」と念を押すと、「私を信じて下さい。すぐに治りますから」と言う。一応３種類すべてを購入したものの、一度に飲ませるのは危険と判断し、効果のゆるそうな漢方薬から飲んでもらった。北京から洛陽まで長時間の旅であったので、当該学生は休養をとりつつ徐々に回復に向かった。

薬局の女性が薬をたくさん買わせようとしていいかげんなことを言ったのか、あるいは本当に全部飲めば効果があったのか、今となってはわからないのであるが、その時は「用心するにこしたことはない」と思った。駅まで見送りについて来た現地の大学教員が「こんなに強い薬を一度に飲んではだめですよ」と言ったので、そちらを信用したのである。

中国人が友人間で、年下の者が年上の者を“哥哥(お兄さん)”、“姐姐(お姉さん)”と呼んだり、互いに迷惑をかけ合う関係であるという点、日本人のように「お返し」をする習慣がない点は、前述した韓国人の場合と同様である[22]。中国人が「お返し」という日本語を聞けば、「贈った物が気に入らないので、それを返すことなのか？」と思うことすらある。杉山・石下 2012:210 は、すぐにお返しをして貸し借りをゼロにしようとする行為を中国人は「日本人は冷たい」と感じるとしているが、日本式の「お返し」を中国人からみれば、「今後親しくつき合っていこうという気持ちがないのだな」ということになるのかも知れない。相原 1999:195-198 の記述にみられるように「人に迷惑をかけること＝その人を頼りにすること」であり、相手を高く評価していることにつながるようである。

ところで、韓国人や中国人の友人関係がかくも濃厚であるのはなぜであろうか。これには、日本のような島国とは異なる大陸ならではの事情が関係していると思われる。第２章でふれたように、中国は常に異民族の脅威にさらされ続け、時にはその支配下に置かれた時期もあった。加えて、歴代王朝はおおむね民から多くを奪い続け、「官(政権側)」からの収奪は「賊」よりもはなはだしいとされた[23]。とりわけ社会が不安定な時期には、自分たちの命や財産を守るために、信頼のおける実力者に率いられた集団に属することが絶対に必要となってくる。それは同時に、「『官』はあてにならない」という考え方にもつながっていく。これは、中国が日本とは異なって「国が滅んだ」という経験をしているためであろう。中国の人々は自分たちを支配する「官」ではなく、自分が属する共同体を頼らざるを得なかったのであり、血縁・地縁を頼り、友人・知人との助け合いによって生き延びてきたのである[24]。韓国人の友人関係が中国人のそれと似ているのも、朝鮮半島が大陸にあり、常に外圧(おもに中国王朝)に悩まされ続けたため、「身内」で力を合わせて生命・財産を守る必要があったということが大きく影響していると思われる。

このように、韓国人や中国人の友人関係は、同じ共同体の成員同士であるという意識が前提となっているため、日本人の目から見ると公私の区別が明確ではないように感じられることもある。日本人にとっての「友人関係」はあくまで「私」の領域に属するものであるため、例えば職場で勤務中に友人と携帯電話で連絡をとり合うのは常識から外れた行為とされるが、韓国社会ではそれほど厳しくないようである。この点については中山 2008:72-73 でとり上げられており、会社で両親や知人と電話でやりとりする韓国人社員に対し日本人上司が注意するのであるが、部下には「ちょっと電話したぐらいで、なんであんなに怒るの？」と陰口をたたかれている。一方、中島 2015:90-96 には、絶えず人とのつながりを保っておく必要から、現代の中国社会が過度のスマホ依存に陥っている点についての記述がみられ、公私いずれの用事であるかにかかわらず、一日の多くの時

間をスマホによる連絡に費やす中国の人々の姿がかいまみえる。これらの現象から読みとるべきは、「公私混同」をすべきでないと考えられている日本社会が正しく、そうでない社会は間違っているということではない。韓国、中国にも「公私」の区別はあるはずだからである。ただ、公私の折り合いをどのあたりでつけるかという点において日本とは異なっているのである。人間関係が濃厚な社会においては、あまりにひどい「汚職」は取締りの対象となるにしても、仕事において「私」の関係をフルに活用しなければ実績が上がらないという現実があろう[25)]。

一方、第2章で述べたように、韓国は歴史的に儒教の影響を強く受け、それは現代韓国の社会規範や道徳などの形で残っている。身近な例としては、目上の人と食事やお酒をともにする際のマナー、目上の人に対する敬語の使用というようなものが挙げられる[26)]。これらはいずれも「見える文化」としての性格が強いものである。わかりづらいのは、韓国人の意識に刷り込まれた儒教的価値観が無意識のうちに彼らの思考パターンに反映され、それが言葉や行動となって表面化するケースである。例えば、日本人が「韓国人男性はマザコンか？」と誤解しやすいのは「彼女よりも母親を優先する」というケースであろう。中山 2008 には以下のような事例が会話文として収録されている。

例８（中山 2008：116-117）

韓国人男性と日本人女性のカップルが「クリスマス・イブを二人で過ごそう」と話していたところ、男性の携帯に母親から電話が入り、「クリスマス・イブは家で過ごしなさい」と言われた。母親の言うことを優先しようとする男性に、女性は困惑する。

このような傾向は、最近では次第になくなりつつあるとされているものの、依然として残っているようである。上記のケースからは、韓国人の心に根強く残る「親を大切にしなければならない」という伝統的な価値観がうかがわれる。年長者を大切にするという意識の強さは、若者が地下鉄のシルバーシートには座らないということや、座席指定券を買って特急列車に乗車していてもお年寄りの姿を見れば席を譲る習慣がみられるというほどであるため、例８のようなケースはごく自然なのであろう。同様のことは、以下のような事例についてもあてはまる。

例９（中山 2008：50-51）

友人同士の美智代とミギョンが、正月をどのように過ごすかについて語り合っている。スキーに行こうと言う美智代に対し、ミギョンは「オンニは実家に帰らないの？」とたずねる。韓国では正月には実家に帰って両親にあいさつし、先祖供養もする。ミギョンはそのことを言っているらしい。

例９の事例に登場する美智代とミギョンは親しい友人という設定であり、前述したように年上の美智代は“언니（オンニーお姉さん）”と呼ばれている。韓国人の感覚では、二人は姉妹に準じる近い関係にあるということになるが、このことは「年長者を敬う」という儒教的な価値観[27)]とは矛盾しないようである。同：42-43 が「年上の友人などあり得ない」というタイトルで、自分より５歳上の人を「友達」だと紹介する日本人と、それに違和感を覚える韓国人との会話を収録するとともに、「韓国では年齢が１つでも上であれば、敬う対象と考えます」という解説を加えていることとも考え合わせれば、自分より年上の人を「敬うべき相手」、「兄／姉」のいずれかにあてはめようとするのが韓国式なのであろう。このように、他者との関わりにおける韓国人のふるまいをみていく際には、「共同体意識」と「儒教的価値観」の双方について知っておく必要がある。同：83 に紹介されているように、部下は先輩・上司を敬い、先輩・上司は後輩・部下を公私にわたって面倒みるという習慣からも、「共同体意識」と「儒教的価値観」が共存していることがみてとれよう。ちなみに、“동갑（同甲）－同い年”であれば初対面でも格別の親しみをみせる韓国人の特性は、上下関係に厳しいことの裏返しであるようにも思われる。

6　コミュニケーションのスタイル

コミュニケーションの多くは言語によって行なわれるが、非言語的要素による部分も大きい。表情や身振りのようなボディ・ランゲージが文化によって異なることはよく知られており、同じしぐさをしてもその表わす意味が異なることはめずらしくないため、異文化コミュニケーションに際してはこれらに関する知識も重要である。本節では「対人距離の近さ」、「タッチングの多さ」、「自己開示の大きさ」、「ストレートな物言い」、「結論を先に言う」といった韓国人の特徴について紹介する。

対人距離とタッチング

言葉のやりとりにともなう非言語的要素としては身振り手振りのほか、相手との距離のとり方、タッチング(身体接触行動)などがある。いずれも言語と同様にコミュニケーションの一部をになうものであり[28]、文化ごとの相違がみられるのであるが、外国語の授業でとり上げられることは少なく、これらに関する知識や経験がないことからくる戸惑いや困惑がしばしば生じる。

コミュニケーションを行なう際に最初に問題となるのは、対人距離であろう。**韓国人の対人距離は日本人のそれに比べると近い**とされ、この点は中国人も同様である。日本人の対人距離のとり方は、お辞儀をするという習慣ともあいまってか比較的遠いのである。中山 2008:14-15 には、初対面のあいさつでどんどん距離をつめてくる韓国人男性と、「何でこんなにどんどん近寄ってくるんだ」と引き気味の日本人男性の会話が収録されている。対人距離には文化ごとに適正とされる遠近の度合いがあり、それが限度を越えて近いと、人間は不快や不安の感覚を抱くものなのである[29]。この会話文に登場する二人は同い年という設定であり、韓国人の方は、初対面であっても同い年ということで親しみを感じて近づいてきたようである。

タッチングの例としては、「手をつなぐ、腕を組む」などの行為が挙げられる。韓国に行った日本人が奇異に感じるのは、男性同士、女性同士で手をつないだり腕を組んだりして歩く人々の姿が普通にみられることである。日本でも子供同士で手をつなぐ姿は見かけるものの、成長すれば、恋人でもない限りやらないことである。朴大王 2013:110-111 には「女性同士で腕を組んで歩くのは、普通ですか？」というタイトルで、同性間のタッチングがしばしば行なわれることを紹介した文章が掲載されている。この点は中国人も同様であり、親しい者同士で手をつないだり腕を組んだりするのはごく普通の行為である[30]。また、中山 2008:124-125 は、韓国人男性が飲み会の席で、初対面の日本人男性の身体にさかんに触れてくる場面をとり上げているが、このような行為は文化的背景を異にする人には理解されにくく、時には誤解をまねいてしまう可能性もある。八代・世良 2010:122-125 の記述にもみられるように、異文化間でタッチングを行なうに際しては、それが相手に対する迷惑行為となったり、人間関係を損なったりすることのないように注意する必要がある。また、朴大王 2013:30-31 によれば、韓国人は家族に対しても“사랑해(サランヘ－好きだよ/愛してるよ)”などと言って親愛の気持ちを伝える。息子が母親を抱きしめることもあるという。このような行為を日本人がみれば、例８の場合と同様に「この男はマザコンでは？」と誤解しやすいが、素直な愛情表現なのである。

コミュニケーションにおけるこのような非言語的要素は、言葉を習得するよりも難しい。相手との距離のとり方やタッチングに対する抵抗感を克服しなければならないし、後者の場合にはそれを行なうタイミングも大切だからである。こうした非言語的要素における文化的相違を知っておくことは、コミュニケーションを円滑に行なうために必要不可欠である[31]。

自己開示の大きい韓国人

韓国人は、初対面の自己紹介において、互いの家族のことなどもいろいろと話したり尋ねたりする傾向がある。日本人よりも「自己開示(自分のことについて相手に話すこと)」が大きいのである。相手の年齢や職業、結婚しているかどうかまでチェックしようとする。日本人は「なんでそんなことまで…」と驚きや戸惑いを感じる。相手が同性、異性のいずれであるかを問わず年齢を尋ねるのは、言葉づかいやつき合い方を決めるために必要だからで、敬語で話すべき相手なのかパンマル(友だち言葉)で話せる相手なのか(＝礼儀を守って接すべき相手なのか気安くつき合える相手なのか)を確かめなければならないのである[32]。これらの点については、中山 2008:10-11、12-13 の「初対面でも年齢は聞く」、「家族関係も必ずチェック」というタイトルの会話文でとり上げられている。但し、若い者が年配の人に年齢を聞くのは失礼とされる。初対面でプライベートなことを話題にするのは中国人の場合も同様であり、相原 2000:41 では「聞きたいことをすぐに聞く」と表現されている。相手についての情報を多く得ることで、互いに共通の知り合いがいないか、今後お互い助け合う関係になれるかどうかなどの判断材料も得られよう。

自己開示の大きさの相対性

自己開示の大きさにみられる異文化間の差異は相対的なものである。日本人も欧米人から見れば相手のことを知りたがる傾向にあるとみられている。山

久瀬著／イ・ギョンス訳 2013:184-186 には、日本人はビジネス上の知り合いに対しても個人的なことを聞く傾向があると述べられているが、ビジネスと個人生活とをはっきり区別する欧米人の感覚から見れば、**相手のプライバシーに関する情報のやりとりをしながら人間関係を築き上げていこうとする日本人の姿勢**は理解しにくいものに映るのであろう。注意しなければならないのは、韓国人が相手の年齢や結婚しているかどうかなどについて聞くのは、前述したように初対面の場であり、その後のつき合い方を決めるためであるという点である。一方、日本人が同様の質問を相手にすることがあるとすれば、それは初対面の場ではなく、**ある程度打ち解けた段階でのことが多く、プライベートなことを話題にするのは、相手と打ち解けて信頼関係を築きたいという意図がある**からなのである[33)]。異文化間の相違を相対的な視点から見る必要があるのは、食事についても同様である。日本人も何人かで食事をすることがあるが、同:60-61 には、**同僚と昼食や夕食をともにして仕事上の人間関係を構築していこうとする日本人の習慣は、個人のライフスタイルや意識を重視する欧米社会の価値観とは異なったもの**である旨の記述がみられる。一方、韓国人の場合は、黒田 2014:249-250 に紹介されているように、仕事が終わった後の飲み会につき合うことには抵抗がないようであり、これが仕事にプラスになるとされている。

このように、異なる文化を比較する場合には、比較の対象が多い方がより客観的な観察結果につながるとともに、「文化相対主義」的な見方が容易となるのである。

ストレートか婉曲か

成戸 2020:179 でもふれたように、韓国人の間では率直な物言いによるコミュニケーションが普通である。もちろん、相手との年齢差や立場の違いに応じて言葉づかいなども変わるであろうが、同格の者の間ではストレートな物言いが好まれるようである。中山 2008:18-19、86-87 には、友人がご馳走してくれているのに「(量が少ないので)これだと後でお腹すいちゃいます」と言う場面や、会議で対立し激しくやりあった後でもごく自然に一緒に食事に出かける同僚の会話が収録されている。自分の気持ちや考えを明確に述べることをよしとする韓国人のこのようなコミュニケーション・スタイルは、遠まわしな物言いをしがちな日本人にとっては受け入れ難いことがしばしばである。一方、韓国人の目から見れば、会議の場では対立を避けるために積極的な発言を控え、事前の根回しや耳打ちなどに精を出す日本人の交渉スタイルは理解しがたいであろう。中国人も韓国人と同じく、意志表示は明確である。中島 2015:86-89 には、店員が客に対して率直に自分の考えを述べるのが誠意ある態度であり、よいサービスにつながるという考え方が紹介されている。

自分の考えを明確に述べたがらないという日本人の傾向は、いわゆる「断り」において最も際立っている。人から夕食に誘われたりした時の「また今度ね」、何かを依頼された時の「それはちょっと(難しいですね)…」などは、日本人であれば「ダメなのだな」とすぐにわかるが外国人には通用しない[34)]。「今度って…いつなの？」、「ちょっと…何ですか？」となる。言葉に出さない限り、それ以上のことは伝わらないのである。また、中山 2008:40-41 には、「時間があったら／できたら行きますよ」という日本語を聞いた韓国人が「来るのだな」と思うことからくる行き違いが生じたケースの会話文が収録されている(同書の会話文では誘われた日本人の友人は来なかったという設定である)。外国人に「日本人は言っていることと考えていることが違う」と言われるケースである。但し、同じ日本人であっても、このような場合にどの程度「来る」可能性があると思うかは一様ではないようである。おかべ・山出 2018:86 には「『行けたら行く』は何%くらい行く？～東西のよくわからない違い～」というタイトルの文章が収録されている。東京と大阪ではどちらの人が行く確率が高いかという点について同書は明確な結論を下していないが、大阪人の方が行く可能性は低いのではなかろうか[35)]。

結論を先に言う

前述したように日本人はストレートな物言いを好まないため、人からの誘いを断る場合にはその理由を先に述べることがしばしばである。これに通じる現象として、日本語の論理の組み立て方は「起→承→転→結」のような論理構造をとるということが挙げられる。結論を最後にもってくるのである。山久瀬著／リ・ギョンス訳 2013:146-147 には、このような論理構造を理解できるのは漢字文化圏の人だけであり、結論を最初に述べる欧米型の論理構造をとる人々からみれば話の流れが理解できないこともある旨の記述がみられる。異なる論理構造をとる者の間

で交渉が行なわれる場合には、当然ながら混乱が生じやすい。相互の主張の食い違いを前面に出してから妥協点を探ろうとする欧米人に対し、日本人は衝突して相手の感情を害することを避け、信頼関係を築いた上で交渉を行なおうとするためである[36)]。

理由を先に、結論を後に述べるという日本式のコミュニケーション・スタイルは日常生活の場面においてもみられ、例えば相手に何かをして欲しい時、やめて欲しい時などに鮮明にあらわれる。相原 1999:162-165、189-195 には、「お宅のお嬢さん、ピアノがお上手ですね→うるさいですよ」、「ねえ、お腹すかない？→食事に行こうか？」、「ちょっと寒くない？→冷房を止めてもらえない？」のような例がとり上げられている。相手の感情を害さないように、できれば結論は言わないでおきたいのである。誘いを断る場合も同様であり、八代・世良 2010:44-46 は、人からの誘いに対して「明日は早いんだ…」と断ったつもりが相手には通じないというケースの 4 コマ漫画を収録するとともに、日本語は言葉そのものよりもそれが用いられたコンテキスト（発話の際の状況や背景知識）に依存する傾向が強いとしている[37)]。但し、同じく漢字文化圏に属していても、中国人の場合は断りの意志表示が明確であり、及川・張 2013:61 の記述にみられるように、断りの意志表示がまずなされるようである。ストレートな物言いを好む韓国人の場合も断りの意志表示は明確であると思われるが、例えば、すでに予定が入っていたとしても新たに誘ってくれた相手との関係の方が強ければそちらを優先するということもあるらしく、**意志表示が明確であるということと、それがどこまであてになるかということは別問題**なのである。

このように、結論を先に述べるか否かということも、コンテキストに依存する度合の強弱と同様に相対的な問題なのである。

7　おわりに

以上、「異文化理解」をテーマとした講義を念頭に、コミュニケーションの際に表面化する異文化間の相違についてみてきたが、これらは各文化に属する人々の「最大公約数」的な特徴について述べたものであるに過ぎない。同じ文化に属していても性別や出身地などの様々な要因によってばらつきがみられるはずであり、育った環境などによる個人差もあろう。本稿でとり上げたのは限られた事例であるものの、韓国人や中国人のものの見方や考え方、行動様式が日本人のそれと大きく異なっていることが理解できよう。これらの知識は、異文化出身者との交流経験を重ねることによって徐々に増えていくのであるが、「なぜそのように考え、行動するのか？」という疑問を払拭しておかない限り、よりよいつき合いにはつながらない。外国語、母語のいずれでコミュニケーションするにせよ、相手の言っていることを正しく理解するためには「異文化理解」のための知識が不可欠であり、今後の外国語教育における必要性は増していくであろう。

注

1）成戸 2008、同 2010、同 2011、同 2012、同 2019、同 2020 は講義や演習に関する内容、同 2009、同 2017 は「学外研修（国内・海外）」に関する内容である。

2）この点については梅原 2003:43 を参照。

3）唐王朝の支配下では仏教よりも道教が重んじられた。ネストリウスはコンスタンチノープルの司教で「異端」の宣告を受けた人。その教義は東方に伝わり、ペルシャを経てインドや中国に入った。「回族」については成戸 2010:117 で紹介した。

4）高麗王朝（918-1392）における国教であった仏教は、朝鮮王朝（1392-1910 ※1897-1910 は「大韓帝国」を称したが、王朝自体は続いていた）になると儒教にとってかわられた。この間の経緯については、姜在彦 1993:117-120、140-142、武田編著 1996:82-84、113-117 などを参照。儒教の基本倫理は「三綱五倫（さんこうごりん）」とよばれる。この点については久田・韓 2017:16-17、72 を参照。中国における儒教は、「革命運動（1919～1949）→中華人民共和国の成立（1949）→文化大革命（1966-1976）」などを経る過程で古い秩序が否定されたため、道徳規範としての地位が大きく低下した。

5）これらの点については、荻野 1997:77-78、NHK2005 年 3 月:70、110、齋藤 2005:123、久田・韓 2017:36-37 を参照。趙顕龍 2016:93-98 には“숟가락을 놓다（匙を置く→死ぬ）”、“국물도 없다（汁もない→何の得もない／容赦しない）”をはじめとする匙や汁にちなんだ韓国語独特の表現が紹介されており、箸よりも匙が重要な地位を占めていることがうかがわれる。

6）韓国や中国に「割り勘」の習慣がないという点については、齊藤 2005:117-120、中山 2008:96-97、成戸 2008:94、久田・韓 2017:56-57 を参照。

7）黒田 2014:124-126 には、目上の相手との握手や物のやりとりの際にも両手を用いる（片手をもう一方の手に添える）という習慣が紹介されている。食事やお酒を頂く際のマナーについては、荻野 1997:79、NHK2005 年 3 月:74、78、110、111、中山 2008:94-95、朴大王 2013:108-109 を参照。

8）韓国の入浴文化については、NHK2005 年 1 月:74、92、齋藤 2005:147-149、中山 2008:24-25、朴大王 2013:16-17

などに紹介されている。

9）韓国の銭湯については荻野 1997:85-87 に紹介されている。公衆浴場には“목욕탕”のほか、規模の大きい“찜질방(チムジルバン－찜질房)”がある。“한증막(ハンジュンマク－汗蒸幕)”は「サウナ」である。

10）八代ほか 2001:98-100 には、時間の感覚にみられる文化ごとの相違についての記述がみられる。約束の時間および謝罪については、成戸 2008:94、同 2010:119、同 2019:161 でもふれた。

11）中山 2008:17 には「コリアンタイム(時間を守らない)」についての紹介がある。

12）「文化相対主義 or 文化相対論(cultural relativism)」の対立概念は「自民族中心主義(ethnocentrism)」である。古田ほか 2013:8-9 には「文化相対論」に関する記述がみられ、極端な文化相対論が含む自己矛盾とその弊害について言及されている。

13）これらの点については、相原 2000:22-23、成戸 2010:113、杉山・石下 2012:216-217 を参照。

14）この点については相原 1999:181-183 を参照。

15）注 13 のほか、さらに八代・世良 2010:92-94 を参照。

16）古田ほか 2013:32-33、94-95 には「謝罪と法意識」、「謝罪と弁明」をめぐる文化的相違についての記述が、八代ほか 2001:69-72 にはアメリカ人と比較して日本人が「謝りすぎ」である点についての記述がみられる。

17）「判断保留(epoche－エポケー)」については八代監修／鈴木著 2004:109-112 を参照。

18）及川・張 2013:61 には、中国人は「友人同士のことは、互いに大目に見る」傾向があるという記述がみられる。

19）相原 2000:12-13、22-25 には、中国語の“谢谢”、“对不起”の使用頻度が以前に比べ高まってきている点についての記述がみられる。

20）中山 2008:36-37 には、「お返し」を渡そうとする日本人とそれに戸惑う韓国人の会話文が収録されている。

21）中国社会における人間関係の築き方については、成戸 2010:119、杉山・石下 2012:208-210 を参照。

22）これらの点については、古田ほか 2013:158-159、中島 2015:80 を参照。

23）「賊」とは王朝側の「官」に対する呼称であり、正規の組織とはみなされないものを指す。この点については高島 1989:17-22 を参照。前の王朝を倒して新たな王朝を建てれば「賊」は「官」となる。

24）この点については、杉山・石下 2012:207、中島 2015:83 を参照。

25）久田・韓 2017:28-29、56-57 は、「コリアンペイ」の習慣や「韓国人の情」が不正、腐敗につながる可能性に言及している。

26）韓国語の敬語については、朴大王 2013:106-107、久田・韓 2017:73、成戸 2020:179-180 を参照。

27）年長者は敬われるとともに、それにふさわしい態度・行動が求められる。この点については朴大王 2013:104-105 を参照。

28）古田ほか 2013:110-111 には、コミュニケーションにおける非言語メッセージについての記述がみられる。

29）齋藤 2005:62 には、日常的な会話をする際の対人距離は、韓国人が「片腕を伸ばした長さ程度」、日本人が 1 メートル程度と示されている。コミュニケーションにおける対人距離についてはさらに、八代ほか 2001:94-97、八代・世良 2010:126-131、古田ほか 2013:116-117、中島 2015:81 などを参照。

30）これらの点については、齋藤 2005:61、中島 2015:81 に紹介されている。タッチングについてはさらに、八代ほか 2001:91-93、八代・世良 2010:122-125、古田ほか 2013:118-119 を参照。

31）古田ほか 2013:114-115 には「視線」のコミュニケーション機能についての記述が、八代ほか 2001:84-86、八代・世良 2010:58-60、104-106 には声の調子やアイコンタクトなどによるコミュニケーションについての記述がみられる。

32）これらの点については、齋藤 2005:4-7、成戸 2019:160、同 2020:179 を参照。ちなみに、韓国では数え年で年齢をいうことが多い。「自己開示」については、八代ほか 2001:46-50、徳井 2002:18-29 に記述がみられる。

33）古田ほか 2013:149 にはこれに反する記述がみられるが、この場合は欧米人と比較しての判断である。

34）日本語にみられるこのような特徴については、八代ほか 2001:75-77、齋藤 2005:18-23、古田ほか 2013:106-107、『研究社 日本語教育事典(「婉曲表現／間接的表現」の項)』を参照。

35）司馬遼太郎の『手掘り日本史』には、大阪出身の同氏が東京の出版社から電話で原稿執筆の依頼をされた際、「イエス、ノウをはっきり言うたら失礼や」という大阪人の物言いが災いして、断ったつもりが引き受けたことになっていたというエピソードが紹介されている。

36）この点については成戸 2019:163、同 2020:179 でもふれた。

37）八代・世良 2010:46 には、日本を含めたアジアは高コンテキストの文化、ヨーロッパでもギリシャは高コンテキストの文化、ドイツは北米などと同じく低コンテキストの文化であるという記述がみられる。コミュニケーションとコンテキストの関係については、さらに古田ほか 2013:68-69、160-161 を参照。

参考文献

相原茂 1999.『中国語の学び方』，東方書店。

相原茂 2000.『あ、知ってる中国語 ── 常用文ファイル 50』，東方書店。

梅原郁(かおる)2003.『白帝社アジア史選書 皇帝政治と中国』，白帝社。

『NHK ラジオ 안녕하십니까？ ハングル講座』，2004 年 9/10 月，2005 年 1/3 月，日本放送出版協会。(略称 NHK)

及川淳子・張嘩 2013.『DVD で体験！中国語実用会話入門』，アスク出版。

おかべたかし・文／山出高士・写真 2018.『くらべる日本 東西南北』，東京書籍。

荻野洋一 1997.『ニッポン人が面食らう 世界の常識・非常識』，河出書房新社。

姜在彦 1993.『新版 朝鮮の歴史と文化』，明石書店。

黒田勝弘 2014.『韓国人の研究』，角川 one テーマ 21(KADOKAWA)。

近藤安月子＋小森和子編『研究社 日本語教育事典』，研究社(2012)。
齋藤明美 2005.『ことばと文化の日韓比較 相互理解をめざして』，世界思想社。
司馬遼太郎 1990.『手掘り日本史』，文春文庫。
杉山明・石下景教 2012.『中国語入門＆異文化理解ハンドブック』，アルク。
高島俊男 1989.『中国の大盗賊 天下を狙った男たち』，講談社現代新書。
武田幸男編著 1996.『放送大学教材 朝鮮の歴史と文化』，(財)放送大学教育振興会。
趙顕龍著／貝森時子・川上洋子・鄭寿香訳 2016.『韓国語教育のエキスパート チョ・ヒョニョン教授の韓国語教師へのアドバイス』，語研。
徳井厚子 2002.『多文化共生のコミュニケーション 日本語教育の現場から』，アルク。
中島恵 2015.『なぜ中国人は日本のトイレの虜になるのか？「ニッポン大好き」の秘密を解く』，中公新書ラクレ。
中山義幸 2008.『韓国人の思考方式を知る ケーススタディ＆フレーズ 55』，アルク。
成戸浩嗣 2008.「コミュニティ政策学部における異文化教育の試み」，『コミュニティ政策研究』第 10 号，愛知学泉大学コミュニティ政策研究所，91-105 頁。
成戸浩嗣 2009.「コミュニティ政策学部学外研修講座 ──『フランスのコミュニティを知る』、『トンキラ農園と浪合小・中学校』 ──」，『コミュニティ政策研究』第 11 号，愛知学泉大学コミュニティ政策研究所，109-123 頁。
成戸浩嗣 2010.「コミュニティ政策学部における異文化教育の試み(2) ── 中国と日本 ──」，『コミュニティ政策研究』第 12 号，愛知学泉大学コミュニティ政策研究所，111-126 頁。
成戸浩嗣 2011.「言語を通して見る異文化 ── フランス語と日本語 ──」，『コミュニティ政策研究』第 13 号，愛知学泉大学コミュニティ政策研究所，21-36 頁。
成戸浩嗣 2012.「言語を通して見る異文化(2) ── フランス語と日本語 ──」，『コミュニティ政策研究』第 14 号，愛知学泉大学コミュニティ政策研究所，19-35 頁。
成戸浩嗣 2017.「愛知学泉大学『国際人基礎力養成講座』 ── 慈済科技大学における“Service Learning”への参加 ──」，『地域社会デザイン研究』第 5 号，愛知学泉大学地域社会デザイン総合研究所，47-58 頁。
成戸浩嗣 2019.「異文化理解と社会人基礎力 ── 異文化を通して見るマネジメント ──」，『愛知学泉大学紀要』第 1 巻第 2 号，愛知学泉大学，155-167 頁。
成戸浩嗣 2020.「外国語学習と社会人基礎力 ── 韓国語・日本語の視点から ──」,『愛知学泉大学紀要』第 2 巻第 2 号，愛知学泉大学，177-196 頁。
久田和孝・韓相宇 2017.『日本人が知りたい 韓国人の当たり前 韓国語リーディング』，三修社。
古田暁・石井敏・岡部郎一・平井一弘・久米昭元 2013.『有斐閣双書 異文化コミュニケーション キーワード〔新版〕』，有斐閣。
彭飛 2006.『日本人と中国人とのコミュニケーション 「ちょっと」はちょっと…ポンフェイ博士の日本語の不思議』，和泉書院。
朴大王 2013.『ソウルスタイル 韓国のそこが知りたい 55』，白帝社。
八代京子・荒木晶子・樋口容視子・山本志都・コミサロフ喜美 2001.『異文化コミュニケーション・ワークブック』，三修社。
八代京子監修／鈴木有香著 2004.『交渉とミディエーション 協調的問題解決のためのコミュニケーション』，三修社。
八代京子・世良時子 2010.『日本語教師のための異文化理解とコミュニケーションスキル』，三修社。
山久瀬洋二著／イ・ギョンス訳 2013.『日韓対訳 ── 日本を読む 日本人が誤解される 100 の言動 国際交流やビジネスで日本を再生するヒント』，図書出版ハンウル。

（原稿受理年月日：2021 年 1 月 7 日）